



「不安の力」

五木寛之著を読んで

住職 横山 正賢

先日書店に立ち寄って新書が並べられてある店頭で「不安の力」(五木寛之著)が目について、早速求めて読み始めると一言一句納得できる内容でした。

この書は、「ぼくはこんなふうにな不安を生きてきた」という見出しに始まり。

「不安。いまぼくは、なんともいえない不安の中に生きている。不安。その言葉には、どこか重苦しいイメージがある。

不安の姿をはっきりと見えた人はいません。「なんとなく」、そして「言い表しようのない」、そんな不気味で曖昧な感覚が不安にはあります」と書きおこされています。

実は私も不安の中に生きているのです。だからこの本の題名が目についたとき、外には目もくれず手にしました。

何が不安かと言うと、あれもこれもと限りがありません。

今春より孫と暮らすようになり、現代の学校の様子が見えてきて、通学途上の小学生の行動や表情が以前にまして目につくようになりました。

いま小中学生の間でいじめが蔓延していると聴きます。児童生徒のみならず、職場においても若い世代を中心に、いじめがあるといわれることを、身近に見聞きするようになりました。

これらの元には、不安を抱える者とおしがつらんで、目障りになる相手を無視したり攻撃するという陰湿ないじめがあるそうです。

教育とか躾はどうなっているのか、少子化といわれる中で子供をわがままに育てているのではないかと心配です。

高齢化社会の医療制度を始め、社会制度はこれで良いのか等々、考えると不安は募るばかりです。

寺報の発刊は私自身の不安解消の手段として思い立ったものでもありません。

寺報「道心」を最初に発刊したのは昭和四十二年一月第一号を発行し、数回の発行で頓挫しました。その後昭和五十六年頃、禅昌寺坐禅会の事務局で再刊され数年続きましたが、またもや休刊となりました。原因は原稿が集まらなかったのです。

現在の紙面の構成で再刊して十九号目となりますが、原稿が集まらないので何時まで続きましようか?

浅学非才の自分を啓発すること、仏法の学びや日常のありようなどに私見を述べて相互理解を深めること、書く側読む側双方の刺激となることを願っています。

しかしどれ程の方々がお読み下さり、ご理解を戴けているかは知れません。

孫の作文を二度掲載した折に、お読み下さった方々から「お孫さん可愛いですね」等の反応があり、ある程度読まれているという実感を味わうことが出来ました。

お寺は人々の癒しの場となり、心の拠り所となり、僧は勝友として人々の癒しの介助者でありたいと考えております。

しかしお寺の行事に直接的に参加する人は檀信徒の三分の一と少なく、檀信徒の皆様は生活の中で菩提寺をどのように受け入れて下さっているのか自問自答し、己の非力にむち打つところです。

欧米にあっても若者の教会離れが嘆かれていますと聴きます。そんな中で仏教への感心は高まっているといわれ、欧米の主要大学には仏教学や宗祖道元禅師の研究が盛んに行われているといわれる。何故だろう：

一方で世界的な規模で、オカルト的宗教や迷信を説く脅迫的宗教に傾倒する人が多いいといわれる元には「不安」から起きる現象かも知れません。

そんな中でこの本と出会い、ぜひお読みいただきたいとご紹介する次第です。

五木寛之さんは敬虔な仏教徒だと思えます。五木さんの著書には親鸞上人の説かれた抄など浄土真宗の教典を拠り所とされた比喩(例え話)が多く出てきます。

しかし宗派にこだわった仏教ではないから論説が素直に理解できるのだと思います。禅昌寺の坐禅会や講座に来られる浄土真宗の門徒の方が「坐禅をし、禅の講座を聴いて親鸞上人の教えが良く理解できるようになった」と言われます。

「不安」はこだわり無く縦横に眼を開き、素直に耳を傾けるとき、生きる力となることが示唆されているように思いました。

死を凝視する目が深いほど、 深く生きられるのです。

愛知専門尼僧堂頭 青山 俊董

また見んと 思ひしときの 秋だにも
今宵の月に ねられやはする

に死を眼前に見据えて生きる目の深さを思うことです。

花は満開、月は満月がいいのでしょうか

『徒然草』で有名な兼好法師の言葉に、
花はさかりを、
月は限なきをのみ

見るものは

越前に永平寺をお開きになった道元禪師は九月二十九日に五十四才の若さでお亡くなりになりました。悪性の腫瘍であったと伝えられております。禪師を慕う多くの弟子や信者さん方の願いをお聞き入れになり、病気の治療のためにお山をおりて京都に向かわれました。木の芽峠で仲秋の名月に出会われ、澄み渡る月影を仰ぎながら思わず口ずさまれたのが冒頭のお歌です。道元禪師はご自分の病気のただならぬことを死が目前に迫っていることを自覚しておられたのでしょうか。再び迎えることはできないであろう秋、今生に見る最後の仲秋のこの名月、どうして寝ておられようか、とおっしゃるのです。禪師の予感どおり、京都に入られて一週間ほどでお亡くなりになってしまわれました。今から約七五〇年前のことです。仲秋の名月を迎えるたびにこの歌を思い出し、そして同時

というのがあります。花見といえは満開の桜を、月見といえは満月を賞でるものと、普通は思っています。ところが兼好法師はそうじゃないとおっしゃる。いつ咲くか、もう咲くかと蕾がふくらんでゆくのを楽しみ、一輪二輪と咲き始めたことに心躍らせ、ほんの一時咲いただけで散ってゆく風情を惜しみ、さらには葉桜を紅葉をそして冬の裸木をと、うつろいゆく姿のすべてを楽しみ、味わってゆこうじゃないかとおっしゃる。月見も十三夜を楽しみ、十六夜を楽しみ、弦月をいと

む。さらには息を殺して月の出るのを待つ時の心のたかなり、雲間に見え隠れする月の面白さ、雨雲におおわれて月のありかをさえ探す術もない時の口惜しさ、そのいずれをも楽しんでゆこうじゃないかとおっしゃるのです。旧暦八月十五日の仲秋の名月の頃はお芋のできる季節、お芋を供えるので芋名月、一ヶ月遅れて旧暦九月は十三夜の月を楽しみ、枝豆を供えるから豆名月とも、栗の季節で栗名月とも呼ばれています。十六日目は十六夜、十七日目は「いまかいまかと立って待っているうち出る」ので立待ち月、十八日目は座って待っているので居待ち月、十九日目はもう立ってても座っても待ちきれないから寝待ち月というのだそうです。面白いですね。

自然も人生も人間の思いとは関係なく一刻もとどまらずにうつろってゆきます。それを仏教では「無常」といいます。そのうつろいゆくすべてを無常を無常のまま受け入れ、そのすべてをむしろ積極的に楽しみ味わってゆこうじゃないかという姿勢がここに見られます。

愛と憎しみは、ひとつの心の裏表

月も雲間のなきは いやにて候
これは室町時代、茶の湯の開山と呼ばれた村田珠光の言葉です。私も何年前のことになります。が、雨のため仲秋の名月を見ることができなかつたと嘆く雲水たちと十六夜の月を楽しんだことがあります。
遠い山の端に大きな月が、みるみるうちにその全身を現しました。一人の雲水が皆を呼びに走り



ました。雲水たちが私の部屋に集まった時には、早くも月は厚い黒雲の中に姿を隠してしまいました。がっかりしながら月見団子がわりのお菓子をつまんでいると黒雲の蔭から、かくれんぼしている坊やがそつと覗き見しているように、月が再び姿を現し始めたのです。皆の歓声の中に姿を現した月はまたアツという間に雲に隠れてしまいました

た。まるで雲と鬼ごっこしているようです。

くものある日 くもは かなしい

くものない日 そらは さびしい

これは八木重吉の「雲」という詩です。人の一生には萌え出づる若葉のような時もありました。真紅に紅葉しあるいは病葉となり、寒風に吹きざちざられ、そして雲や氷雨に閉ざされる日もありましょう。月も雲間があつた方が楽しいように、人生の旅も変化があつた方がよいのです。愛する日があり、憎しみあう日もあり、生まれたと喜び、死んだと嘆き……。おかげで七十年八十年の人生も退屈することなく過ごさせてもらうことができます。月と雲と空と、さらに地上の山やすきと、全体がひとつの視野の中に入っているからこそ美しく、また楽しいのです。

人生の景色も、たとえば愛憎にしても、愛の時は愛のみにとらわれ、憎しみに変わったら憎しみのみで他が見えなくなってしまうと楽しくありません。

愛と憎しみはひとつの心の裏表と、一方の姿にとらわれず、常に全体の展望ができる心の眼の高さを持つて生きることができたら、人生の味わいはまだ深いものになりましょう。

生老病死があつてこそ人生は味わい深い

私の教え子のMさんは、結婚して三人の母となりました。老人性痴呆症のうえに寝たきりとなられたご主人の母親を、すすんで引き取り看病しておられます。

「私たち夫婦と子供二人という核家族の中でしか育っていない子供たちに、老いの日のあること

を、病む日のあることを、そして死んでゆくとはどうゆうことかなどを学ばせるよい機会と思ひ、喜んでお迎えし看病させていただいております」本当は疲れきっているでしょうに、それを少しも見せず、むしろ感謝の言葉を持つて語るMさんに感動し、心からの拍手を送つたことでした。人生の愛憎や損得を、幸不幸を、生老病死を、一生を、一目のうちにおさめたうえで、今日この一瞬を一生懸命に生きることが何よりも大切でした。

いつまでも生きておれる、いつでもやれる、と思ふ心の姿勢が、ついに何もできないまま一生を終るといふ結果を招きます。

死を忘れた時、生もほける。死を凝視する目が深いほど、いまひとときの命も深く生きうるといふもの。老い、病み、死にゆく日のあることの展望ができた時、その時点から省みて初めていま生きている命の座標が見え、自ずからいまどう生きべきかも見えてくるというものでありましょう。「人生はな、いろいろあるからいいんじゃない。人々は何もなかれと願うけど、何もなくていい、退屈でかなわんぞ」とは、ある老師が人生に悩んでいる一人の青年におっしゃつた言葉です。うつろいゆくすべてを、いろいろある人生のすべてを、人生を建立する大切な道具だと大肯定し、積極的に味わい楽しんでゆこうというのです。

秋の名月は単に美しいだけでなく、私たちの人生にとつて大切なことを、そつと語りかけてくださつてるように思います。

※ 本文は、青山俊重尼老師著

「悲しみはあした花咲く」光文社より抜粋したものです。

◆道心・趣味の会◆

俳句

- 虫の秋かなしき記憶 地より来る
 - 人恋へば 銀漢まみ眸に なだれくる
- 当山二十一世 甲田良由 (苔水)

短歌

- いろあする 本に残れる ペンの文字
 - 逝きたる夫の 温もり覚ゆ
 - 真夜に飲む 一杯の水 寂しけれ
 - のみほすほどに 冷たく胃に落つ
- 東区 矢野 淑子

自由律俳句

- 虫目鏡 虫を大きく して見せる
 - 草の実を つけて犬コロ 現れる
- 廿日市市 佐藤 歆次

◆行事報告◆(八月～十月)

- 八月六日(土) 孟蘭盆会法要
今年是被爆六十年に当たりお参りも例年よりも多かった。
- アメリカからも三十六人巡礼者があり三泊四日寄宿された。
- 九月三十日(金)
青山俊董尼老師講演会百人ほどの聴衆で賑わった。中国新聞の取材があり、十月十七日の「洗心」に報じられた。

- 十月二十二日(土) 月見演奏会
「Tsukimi in 寺」フルート&アイリッシュハーブ ジョイントコンサート、三百四十人程の聴衆を魅了した。



第5回「Tsukimi in 寺」コンサート



トークも冴えた永山友美子先生

◎四国八十八ヶ所巡礼の旅満願

- 平成十五年十一月十五日～十六日 第一回に始まり、平成十七年十一月五日～六日第七回目を持ちまして満願となりました。足かけ三年の間一人も欠けることなく満願出来ましたことを感謝いたします。

◆行事案内◆(十二月～正月)

■毎週定例行事

- 暁天坐禅会 月曜日～金曜日
毎朝午前六時～四十分まで
- 水曜坐禅会
午後七時より坐禅・茶話会 終了八時半
- 婦人坐禅会 毎週金曜日
午後一時より坐禅・茶話会 終了三時(第一金曜日のみ坐禅の後、写経、茶話会)

■毎月定例行事

- 上田宗箇流茶道稽古日
毎月一回 第二又は第四金曜日を予定 午後二時から
- 御詠歌の会
※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつもりでご参加下さい。

●御詠歌の会

- 第二金曜日午前十時より自主練習
- 第四金曜日午前九時より講師を招いて練習 昼まで
- 茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師の都合により変更する場合があります。初めて参加される方は、

お寺に電話にてご確認下さい。

■毎年定例行事

- 臘八摂心坐禅会
十二月一日～八日(朝まで) 午前六時より一炷・午後七時より二炷
(年内の坐禅会は八日の摂心終了をもってお休みします。)
- 新春坐禅会
平成十八年元旦 午前八時より
- 新年のご祈禱法要
平成十八年元旦 午前十時より
檀信徒皆様の一年のご無事を祈願する法要です。お参りされた方にお札を差し上げます。
(古いお札をご持参下さい。)

※お寺の寺務は正月五日より通常に戻ります。

■恒例行事

- 年末大掃除のご案内
十二月十一日(日曜日)
午後一時～三時位まで 終了後、希望者により忘年懇親会を開催します。会費 千円
お申込みは当日で結構です。
一年のアカを落すつもりでご家族と一緒にご参加下さい

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。